

I can't put up with nuclear fuel circle.

# だまっちゃおられん！

核燃・だまっちゃおられん津軽の会

会報NO. 15 2011年4月13日発行

## 福島第一原発事故

# 今、何が起きているのか？～3週間後～

※この原稿は、緊急ニュース NO2 と同じ内容です

核燃・だまっちゃおられん津軽の会代表 宮永崇史

福島第1原発の事故はまだ収束の方向には向かない。原子炉と使用済み核燃料プールを冷やすために大量の放水を行ったところ、今度は多量の放射能を含む水があふれ出した。こうなると、作業員が近づけないか、被曝覚悟で作業しなければならない。実際に作業を行っている孫請け業者の社員が新聞のインタビューに答えていた。専門に放射線管理を行う職員も不在のまま、彼らは水につかって作業し、被曝してしまったのだ。1日10万円で日雇いの作業員の募集もあるらしい。極限状態の今、隠され続けてきた原子力の負の部分が次々に明らかになっている。一方で、その汚染された



△福島第一原発4号機の現状 外壁がぼろぼろに壊れている

水は土壌に染み込み、さらには海洋に流れ出ている。IAEA は日本近海の海洋汚染を本格的に調査し始めた。このジレンマの有効な解決策は今のところ見つからない。フランスの原子力関係の高度な技術者が5名派遣されたというニュースも流れた。藁にもすがる気持ちで期待したい。

### この世で最も危険な元素、プルトニウム(Pu)

第一報で私が心配したとおり、微量ではあるがプルトニウムが検出された。東京電力はプルトニウムを検出する技術を有しておらず、原発敷地内の数カ所から土壌を採取して、しかるべき分析機関に依頼したのであった。人類が遭遇した最悪の毒物と言われるプルトニウム。20mg 吸入すると繊維症により一ヶ月程度で死に至り、1mg 吸入すると確実に肺ガンになると言われている(「プルトニウム」J.バーンシュタイン著)。ただし、一般にはこのように mg 単位で吸入することはまずない。土壌から検出さ

れた量も、以前各国が核実験を行っていた頃のプルトニウム量とさほど差はないと報告されている。(原発に警鐘を鳴らしてきた研究者も、プルトニウムに気をとられることなく、他の核種への注意を怠ってはいけないと警告している。)だが、中身が問題である。核爆弾で生じるプルトニウムは $^{239}\text{Pu}$ (\*)と $^{240}\text{Pu}$ の成分が多く、 $^{238}\text{Pu}$ は極めて少ない。一方、今回検出された $^{238}\text{Pu}$ の割合は明らかに原子炉由来のプルトニウムということだ。福島第1原発3号機ではプルサーマル運転されていて、炉心の燃料棒の中にはウランとプルトニウムの混合物(MOX燃料)が使用されている。しかし、ウランを使った一般の原子炉内でもプルトニウムが生成されているため、どちらの原子炉から漏出したものであるかは現在のところわからない。いずれにせよ、プルトニウムの漏出は炉心の損傷が深刻(燃料棒内のペレットが破断)であることの裏付けであるとして、各国のヘッドニュースでも大きく報じられていた。(\* $^{239}\text{Pu}$ はその半減期が2万4千年と長いことで恐れられている。一方ウランの半減期は数億年であり、それに比べると $^{239}\text{Pu}$ は短い。しかしこの短いゆえに、放射能が強いとも言えるのである。原子核反応に限っては、長いとか短いという尺度は人間の感覚とは全くスケールが異なるので注意が必要である。

### まさかの使用済み核燃料溶融

前報告でも述べたが、各原子炉内で一時保管されている使用済み核燃料も熱を発生し続ける。それを大きなプールに沈めて冷やしている。報道写真で見るプールはほのかに青く光って見える。あれは、水がきれいだという理由ではなく(もちろんある程度はきれいであろうが)、放射線(この場合はアルファ線やベータ線などの荷電粒子)が水中を通過する時



△六ヶ所村の岸壁に輸送されるキャスク

に発する、チェレンコフ光である。ノーベル賞獲得の基になった神岡鉱山の地下にあるニュートリノ検出器「カミオカンデ」も同じ原理である。使用済みといえども、放射能も熱も発生し続けているのが目に見えるというわけだ。今回の地震と津波でその水の冷却システムも破壊され、プールの水が冷却できなくなった。それだけで水位が下がり燃料棒が露出し、水素が発生したのである。ここには格納容器などといった防御構造はなく開放系である。水素爆発によっていとも簡単に原子炉建屋の壁が吹っ飛び、放射性物質が飛散した。この各原発の使用済みプールが一杯になると、六ヶ所村の一時貯蔵プールに運ばれる。(使用済み燃料の入ったキャスクがむつ小川原港から再処理工場に運ばれる映像を見たことがあるが、そば降る雨に濡れたステンレスの固まりは、湯気を上げていた。)それらは、そこで再処理を待つことになるのだが、現在六ヶ所村の再処理工場は稼働していないので、一時貯蔵プールには3000トンの使用済み燃料が満杯とのことである。今回の地震でそのプールから600リッターの水があふれたが、冷却機構には問題がなかったらしい。しかし、やはり万全ではなかったのだ。福島と六ヶ所の両方でこの惨事が起こっていたことを想像すると背筋が凍る思いである。

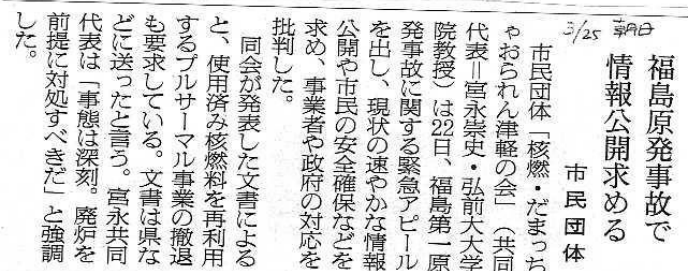
### 翻って、青森県は？

これまでに述べたように3000トンの使用済み核燃料が一時貯蔵されている六ヶ所村の様子はどう

だろう。これまでの政策を早急に見直す動きを期待していたのだが、村議会では核燃料サイクル政策の後退を危惧する声が上がっているという。放射能事故を本気で心配している人たちの話を日々耳にしている我々とは、ずいぶん捉え方が違う。新聞記事から一部議員の声を拾ってみると「村として、再処理工場が必要だと発信すべきだ」「これまでと変わらず着実な推進が不可欠」「万が一、国が再処理の方針を覆せば、村は財政破綻した夕張市より深刻な状況になる」など、青森県一番の裕福な村が転落することを恐れている姿が目につく。事故が起これば、六ヶ所村や青森県の財政だけの問題ではない。今の状況からもわかるように、全世界の人類が福島からの放射性物質を恐れているのである。前報告で青森県知事の筋違いのコメントを紹介したが、これ以上は事業主の言葉を楯に既制路線を貫く姿勢は許されない。地震の後の津波により福島第1原発の冷却水が止まってから、すでに3週間が過ぎた。当初はこれほど復旧に時間がかかるとは思わず、淡い期待を持っていたが、いまやいつ収束するか予想すらできない。日本中が日々命を削る思いで、原発の本当の恐ろしさを実感している。

## 東北地方太平洋沖地震に伴う福島原発事故に関する緊急アピール

3月19日、福島原発事故を受け、だまっちゃんおられん津軽の会は緊急アピールを発表しました。緊急アピールを送付した先は次の通りです。青森県知事、東京電力社長、東北電力社長、弘前市長、東通村長、六ヶ所村長、むつ市長。3月22日に、弘前市役所内記者室にて記者会見を行いました。



### 【アピール本文】

3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波により、犠牲となられた皆様に、深く哀悼の意を表すると共に、被災された方、そのご家族・関係者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、いち早く復興とその支援に立ち上がった方々に対して敬意を表します。

今回の震災を契機として東京電力福島第一、第二原子力発電所では、次々と大事故が発生しており、周辺の住民の多数が避難を余儀なくされており、中には内部被曝を疑わせる人すら出ています。特に第一原発3号機は、昨年9月からプルトニウムを含むMOX（ウラン・プルトニウム混合酸化物）燃料を燃やすすルサーマル運転中でした。また、第一原発4号機では、使用済み核燃料が損傷し極めて強い放射性物質が外に拡散している危険性があります。これらを総合すると、事故の評価レベルは1979年の米スリーマイルアイランド事故を遥かに超え、1986年に発生した旧ソ連のチェルノブイリ事故に迫りつつあり、事態は現在も進行中です。いまや、原子力発電の安全神話が破綻したといえます。

私たちは、従来から国や事業者が推し進めてきた原子力発電偏重政策に警鐘を鳴らして来ましたが、



それを無視した結果がこのような結果に繋がったことに対して怒りを感じます。このような大震災が起こる確率は1000年に1回との説がありますが、これは今回のような大震災は今後1000年は発生しないという確率ではありません。

今は、この未曾有の事故の影響を全人類の英知によって最小限に抑えることが第一ではありますが、そのためにも、私たちは原子力政策に限って次のことを国と事業者に求めます。

- 1、 起きている事象を隠蔽や過小評価することなく、速やかな情報公開をするよう求めます。
- 2、 全国で稼働中の原子力発電所と核燃料・使用済核燃料のあらゆる災害に対しての安全点検を行い、その結果の公表を求めます。
- 3、 新たな原子力発電の建設を中止し、他のエネルギー開発と研究を求めます。
- 4、 プルサーマル事業からの撤退、とりわけ原子力発電所よりはるかに毒性が強い放射性物質を扱う再処理工場本格稼働中止を求めます。
- 5、 今後も、万一の事故が起きたとき、県民・市民の安全をどのように確保するのか、対策の立案と公開を求めます。
- 6、 原子力発電所とその関連施設に頼る地域づくりからの転換を求めます。

以上

## 東日本大震災での支援報告

事務局長（津軽保健生協教育部長） 竹浪 純

3月15～17日まで2泊3日の短い時間でしたが、支援ボランティアの先遣隊として6人（医師2、看護2、事務2）で宮城県塩釜市の坂総合病院（357床）に行ってきました。今ではだいぶ落ち着いた診療体制になってきているようですが、私が行った時はまだ、戦場のような状態で、治療が必要な患者を、緑、黄色、赤の3段階に分けて救急対応をしておりました。幸い病院は水、電気は来ておりましたが、重油が不足でシャワーはありませんでした。

私は、病院の玄関の外で、訪れる方々（具合が悪い人、見舞客、不明者を探している方、トイレを借りる方、などなど）をチェックする隊に入って仕事をしてきました。玄関前でのチェックは、不審者などが、支援物資を持って行くことを防ぐ目的もあります。おりしも、行った時は寒風が吹きすさび、吹雪のような状態となり、各地から支援に入っていた方では、「寒さに強い」長野や青森の支援者が活躍しました。いやあ、やっぱり我々は忍耐強いなど、変なところで自慢してきました。

全国から150名程の支援が入っていましたが、病院の職員も、ガソリンや交通機関がなくて自宅に帰れない人も多数おり、病院施設に寝泊まりしている状態でした。シャワーもなく、へやに雑魚寝の状態、夜勤2交代で診療を支えておりました。入院している方の大変さもさることながら、職員の身体が持つか、そこが一番気がかりで帰ってきました。

塩釜市では、500ベッドの厚生年金病院の機能が失われ、坂病院のみが活着している状態です。現在も、次々と支援が全国から医療従事者が駆けつけており、病院の支援にとどまらず、地域の避難所や自宅にとどまっている方々への医療支援へと活動を広げつつあります。健生病院からも、4月4日から第3次支援隊が松島医療生協へ派遣される予定です。



△ 東通小学校前にて 電源交付金は33億円

## 核燃マネー巨額とムダを実感！見学ツアー報告

～2月13日・14日実施～

代表 大坪 正一

「核燃マネー巨額とムダを実感！見学ツアー」に対して、多大なカンパありがとうございました。今回のツアーは、弘大ランチメンバーが開講した授業「環境と共生D」（21世紀教育＝教養教育）の講義後のオプション企画としても位置づけられていました。この講義は、メンバー7名のそれぞれの専門を生かして、青森県の経済問題、原子力開発問題、新エネルギー問題などを通して、学生に青森県の地域づくりへの関心を持ってもらおうと計画されたもので、昨年の10月から実施されました。講義が終わった後で、実際に自分たちには何ができるかを探るために、核燃マネーの現状をまず見てみようと呼びかけられました。

残念ながら、約50名いた受講生の中で参加したのは1名のみでしたが、そのほかの講義でも呼びかけた結果、信州大学2年生1名を含め7名の学生がツアーに参加しました。参加費は3000円でそれ以上かかった場合はカンパでまかなうという方針のため、参加者が増えるとまた大変なこ

とになったかもしれませんが、何とか皆様方の援助で1泊2日のツアーができました。

初めて見る田舎にある豪華な施設、無駄としかいえないような施設など、学生それぞれの感想はあったと思いますが、特筆できるのは、初日の懇親会の後で、部屋に集まって議論を始めたことです。その結果、青森県の地域の現状を見ながら自分たちの成長を目指すようなサークルを作ろうということでは一致したようです。早速、役員体制を作ったり、4月の新歓を目指して新入生を獲得しようという計画が始まっています。

## 核燃ツアー感想

藤原裕貴子

参加募集のチラシを見て「いい学びの機会になるのでは」という期待を持って申し込んだ。大学生7名を含め18名の参加者。マイクロバス車中は学習、意見交換の場だった。

六ヶ所村のレイクタウン。2日目の東通村の村役場。巨費を投じた村に一つの小学校と中学校。小学校は村内に10校あったものを、地元住民の意思確認もなく統合したという。小学校と中学校は敷地が繋がっていて、広大な地域から朝夕スクールバスでの通学という。加えて驚くべきことが

あった。隣接地に「認定こども園」が建設中だった。村内各地にある保育園、幼稚園はどうなるのだろうか？それらは住民生活に密着し不可欠なものだろうか。それが一ヶ所に統合されるのだろうか？随分、乱暴な構想に思える。今回の核燃ツアーは核燃マネーは住民のための施設になっているのかが問われたツアーだった。

宿泊先の交流会では、むつ地域で粘り強く活動されている3人の方にあえて良かった。

信州大農学部2年 三浦史子

今回のツアーで最も印象に残ったのは、東通村の小中学校のすごさでした。リゾートホテルに総合体育館が併設されたようなレベルで、衝撃的でした。

私は、大学で林学をやっています。林業を勉強する学生は、地方の抱える問題を避けて通れません。林業をやっているような村は、崩壊の危機という場合が多いからです。日本の林業政策は、「どんどん伐れ、どんどん植えろ」というものから「放っておけ」へ、財界の提言に沿った国策により大転換されて今に至ります。林業の衰退は、輸入自由化に伴う財界の動きと国策に振りまわされた結果だと私は考えています。

今回見学した核燃誘致も、電力会社の提言による国策で、地域社会が激変している点で、林業の状況とよく似ていると思います。私は、この状況の一番の問題は、地域のあり方を大きく左右する「金」を、地域ではないところが握る点だと考えました。「金」を握られるというのは、言論、行動、組織の存続の可能性を握られるということであり、団体の大きな弱みになります。最大の問題は、村が、立派な施設や金と引き換えに発言権を失うことだということを、核燃ゲームで核燃マネーカードをためこんだことから実感しまし

た。地方には、純粋に地域復興のためのお金がかかるべきです。

だまっちゃおられんの会の活動は、「自分たちの地域の行く先は、自分たちで決めていく」という信念がとてすごかったです。個人的には、風船を飛ばしたり、お札を作ったりというシュールなおもしろがり方がとても素敵だと思いました。

私も、長野に帰ったら、まじめでアピール性が高く、かつ、素敵にちょっとあほ、みたいな企画の理想をめざしてみたいです。



△再処理工場正面ゲート バスを止めると警備員がとんできた。撮影禁止、駐停車も禁止、と。なんで～？？



△東通村議事堂

「なにこれ～なまこみたい～(笑)」「え～兜でしょ？」  
「なんで～(笑)」どこまでも明るい女子大生の会話。

△ 東通村議事堂最上階

総しざーの椅子、毛足の長いラグ、絶妙の採光・・・  
思わずくつろぐ宮永代表と大坪代表。



## 放射性物質から身を守るには

運営委員(元釜ヶ沢・五所川原・むつ・八戸保健所長) 仁平 将

※この原稿は、緊急ニュース NO2 と同じ内容です

### ☆ 原発周辺の地域の場合

屋内に待避する場合、ドアや窓を閉め、換気扇やエアコンの使用はやめる  
外へ避難するときは、ぬれタオルやマスクなどで口を覆い、皮膚を露出させない  
(タオルやマスクの種類よりはぬれていることが重要)  
外から入るときは、衣服や靴をビニール袋などに入れ、袋の口をしっかりとしばる  
避難区域内の作物は、安全が確認されるまでは摂取を控える  
(以前から屋内に貯蔵していた物の使用はかまわない)

### ☆ 原発から離れていても、放射線量が高くなっている地域の場合

外出は出来るだけ控える  
やむを得ず外出するときは、ぬれタオルやマスクなどで口を覆い、帽子をかぶる  
雨に濡れないようにする、肌を露出しない(あれば、布の傘よりはビニール傘を使う)  
家に戻ったら、玄関前の風上で衣類をはいたり、ちりを落としてから家に入る  
(その際も吸い込まないようにする。複数で互いに行くと効果的)  
顔や髪や髭を洗う。耳の中、爪の間も(花粉症対策と似ています)

◎雨や雪に肌をさらさないように注意する

あればビニールなど水をはじくカッパや傘を使う

◎ヨウ素剤代わりにうがい薬など飲まない

たとえ薄めてもだめ

ヨウ素剤の服用は自治体等から配布された物を指示通りに服用する

妊娠・授乳中女性のヨウ素剤服用は注意が必要です

### ☆ 乳児の水道水摂取を控えるよう呼びかけられている場合

1. 乳児以外の摂取は規制されていないと言えます。乳児以外はいつもと同じように摂取してよい
2. 乳児の水分摂取不足にならないように注意が必要です
3. 母乳育児では、母親は制限せずに食事を取り、授乳を続けてください
4. ミネラルウォーターを使ってミルクを調整する場合、煮沸し適温にしてから使用します。硬水のミネラルウォーターでは下痢のおそれがありますので、軟水を使ってください。すぐ手に入らない場合には、短期間であれば水道水を使ってください
5. 離乳食を食べられる乳児では、人工乳の量を減らすことは問題ありません

## ～放射性物質から身を守るには～（解説編）

### ☆ 放射線の人体への影響は何によって違いが出てくるか？

人体影響を軽減するための3条件は距離・時間・遮蔽物であるといわれていますが、一般には、放射線に被曝した量（被曝量）、被曝形態（外部被曝か内部被曝か）放射線の種類（アルファ線、ベータ線、ガンマ線、中性子線等）、被曝時間（短時間での1回限りか、長時間か）等によります。

一般に、短時間でも被曝量が多い場合には急性障害として現れやすく、少量であっても長時間の被曝の場合には晩発性障害として現れやすいと言えます。

**急性障害**：細胞がたくさんまとまって死滅し、数日～数週間で発症（白血球減少など）するもの（確定的影響）

**晩発性障害**：細胞が生きのまま変異を生じ、年単位の経過後に病気発症（がんなど）を高めます。（確率的影響）

### ☆ 汚染と被曝の違い

**放射線汚染**：放射性物質が体や衣服などに付着すること

**放射線被曝**：汚染の有無に係わりなく、放射線に暴露されること

現在（4月1日）問題になるのは、大気中や水・原乳・野菜から検出されている自然界には存在しない放射性ヨウ素（気体で水や土に含まれて食物に付着することがある）と放射性セシウム（個体で水や土・じん埃に混じることがある）です。

### ☆ 被曝した放射線の量（被曝量）の見方

人体は自然界からの放射線を絶えず浴びています。そして被曝量は絶対安全であるという量（シキイ線）はないと言われています（少なくとも晩発性障害には）ですから人工的な放射線による被曝量は極力少量に抑えるべきです。その点で医療の分野での放射線量（胃や胸部のエックス線検査やCT・治療）を事故や原水爆による被曝量と比較するのは間違いです。医療分野では診断や治療に活用するメリットと被曝するデメリットを比較した上でメリットがデメリットを上回るときのみ使用しますし、絶えず1回あたりの放射線量を少なくする努力をしています（蛍光板の感度を上げたり、コンピューターを組み込んでデジタル化するなど）

### ☆ 被曝形態には2種類あります

**外部被曝**：体の外に放射性物質があり、そこからでる放射線によって被曝すること

放射性物質は皮膚や衣服についていたり水や土壌に含まれている（汚染）遠く離れている（原・水爆）場合が考えられるが、皮膚などが抵抗になり、放射線が体内に入るには大きなエネルギーがいります。

**内部被曝**：放射性物質を呼吸や食事、水などを通して体内に取り込みその放射線によって被曝すること

広島・長崎の原爆では初期放射線がほとんど届かない地域でも、脱毛や皮下出血による紫斑、咽喉障害、下痢などの症状が現れました。

## たたかう農民

運営委員（津軽農民組合事務局長） 須藤 宏

南相馬市の稲作農家・三浦広志さん（51）の田んぼは干拓地。海から1kgの地点にあり、今回の震災で田んぼは水深3～4メートルに沈んだ。「3月11日から人生が変わった。田んぼを見て諦めがついた」という。福島第一原発から11kgしか離れていない。家族を連れて避難所を転々としたあと、娘さんをたより東京へ出て、池袋の農民連（農民運動全国連合会）事務所にひょっこり顔を出したのが3月22、23日ころ。笹渡農民連事務局長の話によると、簡易の放射能計測器が「ピーピー」なり、あわてて防寒着を脱がせたという。大震災から1ヶ月後の4月11日、日本原水協の特別シンポジウム「原発・核兵器 私たちの未来」で特別報告をしている姿をインターネットで見た。「諦めがついた」といいながら、「ものを作ってこそ農民」の農民連のスローガンは下ろしていない。全国の農民連組織が農地を失った仲間の受け入れをはじめていることを紹介している。

NHKで放送された福島の酪農家・佐々木健三さんは農民連前会長だ。牛乳の宅配キャンセルが相次ぎ、「自分の不注意とか、自分のところから出た問題なら自己責任なんですけど、まったく思いもよらないような形で出てきましたから、防ぎようがないですね。非常に残念ですし、悔しい思いがありますね…」とコメント。私が知っている穏やかな口調は変わらないが、悔しさ怒りがにじみでていた。

福島県だけではなく、被災した農漁民は地震・津波の天災に加え、「安全神話」の末路、原発事故



による放射能拡散、風評被害の四重苦に見舞われている。農協出荷のいちごは1パック通常300円が5円ないしは値がつかない。自力で販路を開拓してきた産直米が、昨年とれた米でも返品、代金返還を求められている。

福島県農民連は、県内のほうれん草、小松菜などの葉物野菜やブロッコリーから暫定規制値を大幅に上回る放射性物質が検出されたと厚労省が発表した3月23日にいち早く、「3.11 大地震・原発事故に農民として生き抜くぞニュース」(No.9 3月23日付)を発行し、収穫せずうなう場合は、うなう前とうなった後の日付つきの写真を撮っておく、キャンセルを受けた場合は口頭で済まさずに必ず文書でもらう、栽培記録の保存などを呼びかけている。

動揺する会員へ「ニュース」は呼びかける。「私たちの立場は、明確です。それは、農民連のスローガンである『ものを作ってこそ農民』です。この事態を引き起こした全責任は、東京電力にあります。ものを大いに作って、もし出荷ができないとしたら東京電力と国に対して『損害賠償』を求めてたたかう以外にありません。被害補償のための証明書等を保存してたたかいに備えましょう。たたかいは、これからです。国民のいのちと美しい国土を守りきれるのは、私たち農民しかいません。いまこそ、農民として生産を手放さず生き抜こうではありませんか」。

須賀川では被災した農民連会員がみずから命を絶った。「生き抜くぞニュース」は、彼に叫び続けているようにも思える。

3月28日、宮城県農民連事務所(大崎市)で支援対策会議があった。5人乗りの小型乗用車にりんご100kg、リンゴジュース1リットル30本、キャベツ50kg、冷凍イカ、卵段ボール3ケース、白米30kg、ほうれん草20束、日用雑貨、人間2人を積み込んで高速道を走った。会議では各地の被災状況、救援活動の様子を出し合い、今後の課題を確認した。連日、支援の食料を運び込み、避難所へ届け、炊き出しをしている。会員の飯米をカンパとして集めて送り込んでいるが、「そろそろ米の支援は限界だ」との声が上がった。「いまの農家はそんなに米をもっていない」「政府備蓄米を出させよう」。

笹渡事務局長が「国は備蓄米の放出を拒否している」と農水省交渉の結果を報告した。拒否の理由は「民間在庫が20万トンあるから」だと言う。みんなの目つきが変わった。「なんのための備蓄米だ」。帰ってから、この話を自治体の農政担当課長に話した。「民間在庫? ただ(無料)でないよな。これから被災者へ支援金がかかるから、それで米を買ってことか」「備蓄米を被災者へ、まったく同感だ」。

4月27日には、東北農政局交渉を行う。

## 個人情報垂れ流し 県知事に抗議文提出

2008年にだまっちゃおられんの会が取り組んだ署名を県知事に提出した際、会見での発言者の名前と発言内容が記載された県庁の内部文書と署名の趣旨説明に記載された代表4名の住所と氏名がマスキングされないまま、組織的に日本原燃に渡されていた件で、2011年1月25日に県に質問状を提出し、2月4日に回答を受け取りました。しかし、内容は今後も日本原燃への情報提供を続けるなどとし、謝罪の言葉もない不誠実なものであったため、それに抗議する抗議文を2月24日に提出しました。県庁内記者室にて記者会見を行い、記者会見には東奥日報、陸奥新報、河北新報、デーリー東北の4社が参加、陸奥新報と東奥日報に記事が掲載されました。また、東奥日報の社説でも紹介されました。

# 関連施設 最新情報

## 福島第一原発事故

・福島第一原発のしくみは冷却水を沸騰させ原動力とするようになっており、冷却水は海水により冷却されて液体に戻る。この水を戻す給水ポンプが停止したため、冷却水が戻らなくなった。燃料棒の被覆管はジルコニウム合金できており、ジルコニウムは高温になると水蒸気と反応して水素を発生する。水素が一定量を超えると酸素と反応して爆発を起こした。格納容器の破裂を防ぐため中の水蒸気を放出する手段がとられた。これで、多少の放射性物質が漏れた。燃料棒が露出し2700度を超えメルトダウンを起こした。放射線の単位は、マイクロシーベルトとミリシーベルトでは1000倍違っている。1年あたりか1時間あたりかで9000倍も違うので見るときには注意が必要だ。安全保安院は、このたびの事故をレベル4と位置づけているが、これは大きな間違いだ。(チェルノブイリ事故はレベル7、スリーマイル事故はレベル6)事故当初アメリカから廃炉を前提とした救済申し入れがあったが、国と東電はその時点では原子炉を再利用することにこだわり、断ってしまい、結果住民を危険にさらした。(3月16日運営委員会での宮永代表による報告の概要)

・原発災害補償は数兆円になる見通し。賠償金は、国が1200億円まで負担する政府補償契約制度があり足りない場合は東電が負担する。全額を支払えないときは政府が補助金や低利融資をすることになっている。ただ、最終的な負担者は、政府が保障するなら税金、東電が背負うなら電力料金で結局国民が支払うことになる。(11.4.6 東奥日報)

・高濃度の放射能汚染水の保管場所を確保するため、東電は、4月4日低汚染水1、1万トンを海に放出した。数日かけ計1万1500トンを放出する。今回の事故で汚染水を意図的に放出するのは初めて。保安院はやむを得ないとこれを了承。(11.4.5 東奥日報)

・茨城県産こうなごから1キロあたり4080ベクレルの放射性ヨウ素が検出された。(11.4.5 東奥日報)

・4月12日、原子力保安院は国際的な基準に基づく福島原発事故の評価をチェルノブイリと同じレベル7と発表した。広い範囲に大量の放射性物質が放出されていることを重視。これまでのレベル5から引き上げた。(11.4.12 朝日新聞)

## 再処理工場

・A系統のガラス溶融炉で現在進められている金属残留物の除去作業が終了する。新型除去装置の開発などにより、作業が順調に進んだ。(東奥日報 10.12.23)

・B系統ガラス溶融炉への改良温度計の取り付け作業が終了した。ガラス溶融炉製造試験難航の主な原因である溶融ガラス流下不調について、原燃はこれまでの調査で炉内の温度管理に問題があると判断。改善策として測定ポイントを増やした改良温度計を設置した。(東奥日報 11.1.29)

・使用済み燃料受け容器貯蔵施設内に大量の低レベル放射性廃棄物が仮置きされていた問題で、原燃翌保安院が2月14日、貯蔵建屋新設等の改善計画を認可した。認可されたのは、最大保管能力約1万3500本(200リットルドラム缶換算)の低レベル廃棄物貯蔵建屋の新設、最大保管能力約430本の貯蔵室を使用済み燃料受け容器貯蔵施設内に設置、など。

・再処理工場の外部電源が余震で途絶。非常用発電装置で停電は同日午後には回復。(11.4.8 東奥日報)

## ウラン濃縮工場

・日本原燃は、稼働中の遠心分離機を12月15日で止め、濃縮ウランの生産を停止すると発表した。新型遠心機への更新作業を安全に進めるため、原燃への燃料供給に問題はないとしている。原燃は、今後10年程度かけて全遠心分離機を更新。増設工事を行う予定。新型機の導入工事では、空調設備の更新も伴い、初めての作業で安全を期すため、現在稼働しているシステムも止め、内部に残留したウランを回収して工事を進める。(東奥日報 10.12.15)

## 福島第一以外の原発

・浜岡原発4号機の原子炉圧力容器内にある蒸気乾燥機の溶接部に、長さ15ミリ~21ミリ、深さ最大15ミリのひび割れが見つかった。金属に引っ張る力が加わることで生じ、溶接部に起きやすい「応力腐食割れ」とみられる。(東奥日報 10.1.6)

・敦賀原発1号機の非常用ポンプのディーゼル機関が自動停止するトラブルがあった。本来閉まっているはずのシリンダー排気弁16個全てが開いた状態になっていた。(東奥日報 11.1.13)

・高速増殖炉もんじゅで、12月28日、作業ミスにより北陸電力の送電系統で短時間電圧が低下するトラブルがあった。敦賀市の一般家庭や工場など、3万5千戸で機器の電源が落ちるなどの影響が出た。作業員が送電停止を確認する前に放電した結果、地中に大量の電気が流れ電圧が低下した。(東奥日報 10.12.28)

・もんじゅの装置落下復旧費用は、13億円を超えることが明らかになった。昨年8月、燃料交換用装置が原子炉容器内に落下した事故で、原子力機構によると、変形して使えなくなった装置を新造するのに約4億4千万円、装置回収に使う器具の製造などに約9億4千万円。いずれも東芝と契約を結んだ。(東奥日報 11.1.29)

・女川原発、福島第2原発は、東日本太平洋沖地震による津波被害で緊急停止。(11.3.11)

・定期検査中の東通原発1号機の外部電源が余震で途絶。非常用発電装置で使用済み燃料プールの冷却を継続した。停電は同日午後には回復。(11.4.8 東奥日報)

## 電源交付金

・海外返還低レベル放射性廃棄物の貯蔵管理施設が交付金の対象となることから、2011年度の電源交付金は1、2%増。全体で1110億円が計上された。(東奥日報 11.1.25)

## 返還廃棄物

- 四国・九州電力は、英国から六ヶ所村に今年返還輸送される予定の高レベル放射性廃棄物 76 本のうち、両社が所有する 15 本分のデータに誤りがあったと発表した。誤りがあったのは、発熱量と放射性物質の放射能濃度の数値。搬出前検査の準備段階で、セラフィールド社が 10 本分のデータに誤りがあることに気づき、昨年 10 月に両電力に連絡。11 月にも新たに 5 本分の誤りが判明した。(東奥日報 11.1.7)

## だまっちゃんおられん活動報告

### 2010年

- 10月20日(水) 第6回運営委員会
- 10月21日(木) 県内反核燃各団体に連絡会の結成の要請文書送付
- 10月21日(木) 当会加入各団体へ、「〇〇と核燃」講座開催の要請送付
- 10月31日(日) 下北の原発と核燃を考える会から連絡会結成に賛同する旨の連絡あり
- 11月4日(木) 県に5団体共同申入れ 7名(阿部、安藤、大坪、竹浪)
- 11月5日(金) 核燃・秋の紅葉祭り街宣(阿部、藤原、小西、仁平、三浦、竹浪)
- 11月14日(日) 広瀬隆講演会 約50名(安藤、三浦)
- 11月17日(水) 会報14号発行
- 11月17日(水) 第7回運営委員会
- 11月19日(金) 青森県情報公開個人情報保護審査会より高松運営委員の異議申立に対する答申が出された。
- 11月30日(火) 行政文書不開示決定処分に対する異議申立について、青森県が決定書を出す。結果は棄却。
- 12月5日(日) ここほれわんわんプロジェクト六ヶ所現地地層調査 立石先生、松山先生(宮永、高松、仁平、三浦、竹浪)
- 12月6日(月) ここほれわんわんプロジェクト六ヶ所現地地層調査2日目 立石先生、松山先生(宮永、三浦、竹浪)
- 12月6日(月) 第11回市民講座(於、弘前市民参画センター) 30名 立石先生(宮永、大坪、安藤、阿部、坂本、藤原、中澤、木村、山本、高松、仁平、小西、三浦、竹浪)
- 12月15日(水) 第8回運営委員会
- 12月20日(月) 日本原燃へ公開質問状を郵送

### 2011年

- 1月14日(金) 弘大ランチ会議(6名)
- 1月18日(火) 日本原燃に日程調整で電話(竹浪)「会わない。文書回答のみ」との返事
- 1月19日(水) 第9回運営委員会
- 1月25日(火) 県知事に公開質問状提出
- 2月1日(火) 日本原燃より公開質問状に対する回答が文書で届く
- 2月4日(金) 県より公開質問状に対する回答が文書で届く
- 2月4日(金) 日本原燃に再度公開質問状を郵送
- 2月13~14日核燃ツアー 16名(宮永、大坪、仁平、藤原、三浦、竹浪)
- 2月16日(水) 第10回運営委員会
- 2月24日(木) 青森県へ個人情報保護の件で抗議文提出・記者会見(宮永・安藤晴美・高松・竹浪・三浦)
- 3月1日(火) 弘大ランチ会議(大坪・宮永・荒川・福田・倉坪・三浦)
- 3月17日(木) 第11回運営委員会(14名出席)
- 3月22日(火) 福島第一原発事故に関わって記者会見(於、弘前市庁舎記者室)(宮永、阿部、安藤、大坪、仁平、高松、須藤、坂本、三浦、竹浪)
- 3月22日(火) 緊急ニュース「今、何が起きているのか?」①発行(宮永論文)(別紙2) 会員郵送、赤旗2400部折り込み
- 4月5日(火) 緊急ニュース「今、何が起きているのか?」②発行(宮永、仁平論文) 赤旗2000部折り込み
- 4月6日(水) 第12回臨時運営委員会

### <ブログ発行状況>

- 10/26 県の個人情報垂れ流しの無頓着さに関する意見書提出(三浦)
- 10/28 街宣&講演会のお知らせ(三浦)
- 11/1 「〇〇と核燃」講座主催のお誘い(三浦)
- 11/2 読んで楽しい核燃用語(三浦)
- 11/4 青森県知事に要請書提出(三浦)
- 11/5 「核燃再処理工場の根本的見直しを」と県に要請(竹浪)
- 11/7 ホテル住まい(三浦)

- 11/9 サハラソーラーリーダー計画（三浦）  
 10/19 チャリンコキャラバン&BBQ&カードゲーム大会実施（三浦）  
 11/18 12月4日と6日 立石教授講演実施予定（三浦）  
 11/20 説明は理解困難（三浦）  
 11/26 田原総一郎氏へ講演料110万円（1）（三浦）  
 11/30 六ヶ所情報 エーアイエス破産申請（三浦）  
 12/07 新潟大学立石教授を迎えて断層調査（三浦）  
 12/14 広告（三浦）  
 12/16 もんじゅ 動かなくても1日¥55,000,000（竹浪）  
 12/21 日本原燃に公開質問状を送りました（三浦）  
 12/28 謹賀新年（三浦）  
 1/17 電源交付金の巨額を実感（三浦）  
 1/18 怖いのは地震（三浦）  
 1/19 原燃、公開質問状への説明・意見聴取を拒否（三浦）  
 1/24 すげげ・・・すげげげげ・・・（三浦）  
 1/25 六ヶ所村と東通村の昭和63年以降の電源交付金交付総額（三浦）  
 1/26 県知事へ公開質問（三浦）  
 1/31 日本原子力産業協会の広告に意見を出そう（三浦）  
 2/1 日本原子力産業協会の広告に意見を出そう（三浦）  
 2/2 日本原燃 意見交換はムダ？（三浦）  
 2/4 公開質問状に回答が来ました 全文公開！（三浦）  
 2/7 日本原燃 公開質問状への回答（2）  
 2/8 日本原燃 公開質問状への回答（3）  
 2/9 日本原燃への公開質問状への回答（4）  
 2/15 日本原燃 公開質問状への回答（5）  
 2/17 核燃マネー巨額とムダを実感！見学ツアー報告（1）  
 2/18 核燃マネー巨額とムダを実感！見学ツアー報告（2）  
 2/22 核燃マネー巨額とムダを実感！見学ツアー報告（3）  
 2/25 青森県知事に抗議 個人情報  
 3/2 核燃マネー巨額とムダを実感！見学ツアー報告（4）  
 3/3 核燃マネー巨額とムダを実感！見学ツアー報告（5）  
 2/15 日本原燃 公開質問状への回答（5）  
 3/10 核燃巨額とムダを実感！見学ツアーやっとおしまい（6）  
 3/18 福島原発事故に関する緊急アピール（三浦）  
 3/20 緊急レポート 今、福島で何が起きているのか（上）（宮永）  
 3/21 緊急レポート 今、福島で何が起きているのか（下）（宮永）  
 3/28 弘前大学被ばく医療総合研究所 市民公開講座のご紹介（三浦）  
 3/30 今日だけは。私事。（三浦）  
 4/1 書くことがありすぎて何も書けない（三浦）  
 4/2 今、何が起きているのか？福島第一原発事故3週間（上）（宮永）  
 4/3 今、何が起きているのか？福島第一原発事故3週間（下）・放射性物質から身を守るには（下）  
 元保健所長が語る（宮永）（仁平）  
 4/4 放射性物質から身を守るには（下） 元保健所長が語る（仁平）  
 4/5 汚染はどこまで広がるのか（三浦）  
 4/6 3月13日～17日までの塩釜被災地支援の報告（竹浪）

#### 編集後記

連鎖して爆発するのかと凍りつくように緊張した水素爆発の日から1ヶ月が過ぎようとしています。福島第一原発事故は、国際的な事故の評価（INES）でチェルノブイリと同等の「深刻な事故」レベル7と判定されました。放射性物質が外部へ放出される事故はレベル4となり、以後は外部に放出された放射性物質の量でレベルが決まるということです。

福島の太平洋沿岸部は、今、人影もなく無人の瓦礫の街と化しています。桜だけが静かに咲いているそうです。文字とおり、沈黙の春です。胸が痛い。（み）



発行：核燃・だまっちゃおられん津軽の会事務局

連絡先：080-5229-6076（竹浪） takenami@coral.ocn.ne.jp